2004年4月27日発行　通巻第5号

地球となかよし
教育出版

Educo

地球時代の教育情報誌 エデュコ

NO.4 / 2004年 春

国内における世代間の異文化理解が大切だと思います。

地球となかよしインタビュー
アフガニスタンの難民と共に　中村　哲 ❷〜❸

知っておきたい教育NOW
①自ら本に手を伸ばす子供を育てる　北原保雄 ❹〜❺
②学校選択制の導入を教育の活性化にどう生かすか　葉養正明 ❻〜❼

有田和正のおもしろ授業発見！ ❹ ❽〜❾
3R学習へのご招待　井内摂男 ❿〜⓫
インフォメーション 北から南から ⓬〜⓭
BOOK REVIEW ⓮／「知」を創る学習指導 その3　角屋重樹 ⓯
COLUMN ほっとな出会い　増田明美 ⓰

地球となかよし
インタビュー

アフガニスタンの難民と共に

中村　哲先生（医師・ペシャワール会現地代表）

病気は後で治せる、まず生きることが先決――中村医師は旱魃に苦しむアフガニスタンの人々と共に井戸を掘り始めた。医療活動のかたわら掘りあげた井戸の数は一〇〇〇本。現地の人々と苦しみを共にし、戦乱・疾病・苦難の痛みを癒す中村医師の献身的な活動に対して、2003年度マグサイサイ賞が贈られた。

◆このたびは、アジアのノーベル賞といわれるマグサイサイ賞（平和・国際理解部門）の受賞おめでとうございます。

ありがとうございます。ぼくがもらっていいのかなという気持ちはありましたが、現地のPMS（ペシャワール会医療サービス）や二十年間、物心両面で支えてくれた国内のペシャワール会員一万二千人の代表のつもりでいただきました。

◆これまでの現地での活動のなかで、最も苦労されたことは何ですか。

一通りいろんな苦労をしましたが、なかでも難しかったのは人間関係の調整です。マグサイサイ賞で、平和・国際理解賞といみじくも言っているように、いかに他の人を理解するか、そして一緒にいい仕事をしていくかには非常に神経を使います。それは現地の人とだけでなく、日本人同士でもそうです。一〇〇人いれば一〇〇の考え方があって、それを乗り越えて「これは誰にとってもいいことである」と理解を得て何かをするのには、かなりの努力と我慢がいります。また、こちらの考え方が間違っていたり、偏見があったりもするので、自分自身を調整することもあります。

現地はいろいろな民族を抱えていて、政治的な考えや風土・習慣が随分違う場合があります。日本といういわゆる進歩した国と、現地の近代化されていない社会、このギャップを埋めるのが大きな仕事だったと思います。

◆医療活動で現地に向かわれたのに、井戸掘りをされたのはなぜですか。

もちろん、医者として患者一人一人を助けていくことは大切ですが、現地で考えなきゃいけないのは「なぜ病気になるのか」「なぜこんなに衛生状態が悪いのか」ということで、やはり医療人としては清潔な水を確保することを最優先に考え、そう動かざるを得なかったんです。日本では豊富な水があって、水利土木の専門家もいます。その基礎の上に我々の生活や医療が成り立っています。しかし、現地ではまずその基礎の部分から始めなくちゃならないというのが実態でした。

最初はボーリング機械を使うことを考えましたが、現地で機械をどうやって運搬するかという問題にぶつかります。貧しい国なので、道路もほとんど舗装されていません。また、電気もありませんし、メンテナンスのできる人もいません。

そこで、現地のやり方に沿ったかたちで援助するのが最もいい方法ではないかと考えました。結局、彼らには手掘りが一番分かりやすかったんです。それに当時は水位がどんどん下がっていて、ボーリングはチューブを入れるだけですから、もし井戸が枯れた場合は再生できません。ところが手掘り井戸だと、水位が下がっても、さらに数メートル掘り下げることは可能です。中には七十や八十メートルというのもあります。だから、住民の側から手掘りにしてくれと、わざわざ言ってきた地域がほとんどでした。

あの頃、ドイツやデンマークの団体がボーリング機械を持ち込んで掘っていました。はじめはうらやましくて、「俺たちにもあんなのがあったらいいな」と思いましたが、結果的にボーリングで成功した例はほとんどありませんでした。ウサギとカメの競走で、カメが勝ったというところでしょうかね。

中村　哲先生 プロフィール

1946年福岡市生まれ。九州大学医学部卒。国内の診療所勤務を経て、1984年パキスタン北西辺境州州都のペシャワールに赴任。ハンセン病を中心としたアフガン難民の診療に携る。PMS（ペシャワール会医療サービス）総院長、ペシャワール会現地代表。2003年度マグサイサイ賞（平和・国際理解部門）受賞。主著『ペシャワールにて』『医者井戸を掘る』（以上、石風社）、『アフガニスタンの診療所から』（筑摩書房）など。

◆「緑の大地計画」という用水路づくりにも取り組まれていますね。

アフガニスタンの難民の大半は、旱魃難民です。ところが、政治や戦争の問題ばかり取り上げられて、現地の人々が本当は何に困っているのかは日本にほとんど伝わりません。私たちがオペレーションしてるアフガン東部、南部、西部では旱魃が人々を一番苦しめていて、二〇〇万人以上がパキスタンに逃れています。それを無理に帰しても砂漠化した場所で生活はできないので人々は大都市に流れ、これが治安悪化の原因になっています。食べるために何らかの賃金が必要ですが、みんなが職につけるわけではない。そこでまた不安が募るという悪循環です。

以前、UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）が二〇〇万人の難民のうち一七〇万人を帰したといい、その後の帰還計画で、さらに一八〇万人を帰すと発表しましたが、数字のつじつまが合わないんですよ。つまり帰しても生活ができないのでまた戻ってくるからなんです。だから難民帰還計画を延々と続けても、彼らが元の土地で生活できる条件を整えない限り、難民は減りません。

また、難民の死亡者はほとんどが子どもです。一番多い死亡原因は、栄養失調状態から脱水状態になり、汚い水を飲んで赤痢などにかかってしまうケースです。これを考えても、まず清潔な飲料水を確保し、それから十分に食べられるようにすることが必要なんですね。

アフガニスタンは、国民の九割前後が農民だといわれています。農業は基本的に自給自足ですから、たとえ隣町が滅びても、自分さえ耕しておけば生き残れるという世界です。つまり彼らはもともと農業や土地に対する愛着が非常に強いわけで、だけどやむを得ず難民化している。水を引いて十分食べられるようにすれば、みんな土地へ帰ってきて耕し始めます。

だから医療の立場から言っても、診療所を一〇〇つくるより、十分に潤せる用水路を一本つくった方が犠牲者を減らすためには早道なんです。もちろん、人間の命の尊さは数だけではありませんが、最低限の生きていく条件があって、その上に医療は成り立っていきます。そう考えると、診療所の機能は一時拡大を停止してでも、「緑の大地計画」に集中すべきだというのが私たちの結論なんですね。

●伝統的な井戸の手掘り

◆現地住民のための国際協力とは、どうあるべきだとお考えですか。

まず、現地にとって今本当に必要なものは何かということを知ることです。そのためには、そこに住んで生活しているおじさん、おばさんに聞くのが一番いいんです。日本でも田舎もあれば都会もあるし、寒冷地もあれば温暖地もあり、地域によって考え方も違えば必要なものも違うはずです。まさか沖縄にラッセル車を贈るなんてことはしませんからね。よそ者が来てこれがいいと押し付けるものでは決してありません。ここに国際協力というときの基本的な問題があるという気がしてなりません。現地の人々が何を考えていて、何を欲しているのかを汲む、そのことが大事だと思います。そのことをぼくは「現地主義」と言っています。

私たちは往々にして、一部の人の意見からその国の姿やイメージをつくってしまうことがあります。例えば「アメリカは戦争好きでとんでもない国だ」という批判がありますが、決してアメリカ人みんなが戦争好きというのではないわけですから。その国の実情を知るには、限られた人々の発言や材料でその国を判断してはいけないという気がします。これはアフガニスタンだけでなく、他の国にも言えることではないでしょうか。

◆今、小・中学校の「総合的な学習の時間」などで、国際理解や異文化理解の学習が行われていますが。

私にも小学校から大学までの子どもがいますので、学校でそういう活動が行われていることは聞いています。韓国の人が来るといって簡単なハングル文字や韓国語を覚えたり、英語を覚えたり。そうやって自分と違った言葉を使い、違った考え方をする人がいることを子どものうちから知っておくことは大切なことだと思います。

ただそこで問題なのは、自国の文化を大事にしていないと自己紹介もできないし、異文化交流もできないということです。この点を真剣に考えるべきだと思います。日本としてのアイデンティティというか、「我々は日本人だ」という同一性がどこにあるかということをしっかり考えなければいけないと思います。

日本人はよく「宗教心がない」といわれますが、日本人としての道徳心は昔からあるわけです。その元は、お寺にお参りするなどの日本の伝統的な生活の中で培われ、無意識に定着しています。我々は神社の境内で小便しようとは思いませんよね。そういった培われた文化が崩れつつあるというのが今の日本の実態ではないでしょうか。

そういう伝統や文化を、若い世代は「古臭い」といい、一方、古い世代は「この頃の若いもんは」と嘆いている。これでは本当に日本文化の継承はなくなります。日本人が古来育ててきた伝統や道徳的な考え方を大切にしないと、やがて日本人は国籍不明になり、異文化理解どころか、自国と他国との違いも分からなくなるということになりかねません。国内における世代間の異文化理解が大切だと思います。

■**ペシャワール会**
中村医師のパキスタン・アフガニスタンでの医療活動を支援する市民団体。
〈事務局〉〒810－0041
福岡市中央区大名1－10－25
上村第二ビル307号
電話　092－731－2372
FAX　092－731－2373

知っておきたい
教育NOW①

自ら本に手を伸ばす子供を育てる

「これからの時代に求められる国語力について」（答申）の解説

文化審議会副会長・国語分科会会長　北原保雄

■答申までの経緯

今回の答申は、国語審議会が文化審議会の中の分科会の一つとして位置付けられた最初の答申である。文化審議会における文化芸術の振興に関するほぼ一年の審議を踏まえて、文部科学大臣から文化審議会に対して、「これからの時代に求められる国語力について」の諮問がなされたのは平成14年2月22日の第20回総会においてだった。この諮問に関する審議は直ちに国語分科会に付託された。これからの時代はどういう時代になるか、どういう能力が必要とされるかを見極めるのも容易なことではないが、「国語力」をどういう能力として捉えるのかも難問である。

文化審議会の委員の任期は1年である。5名の委員を中心に20名の臨時委員を加えて分科会を構成し、第1回国語分科会が開催されたのは平成14年3月27日だった。テーマが大きくて広い分野にわたるので、まずは委員による自由討議を重ね、各界の有識者から意見を聴取し、それを踏まえて、各委員にアンケートを行ったりして、論点を絞り内容を掘り下げる努力をした。その結果、平成15年1月29日に「審議経過の概要」をまとめた。

この間、国会において、「文化芸術振興基本法」（平成13年11月30日）が成立し、それに基づいて、「文化芸術の振興に関する基本的な方針」が閣議決定された（平成14年12月10日）。その中で、文化芸術の振興における国の役割として、特に重視して取り組んでいくべき事項として「国語」があげられたのは心強いことだった。

2年目もほぼ同じ委員構成により1年目における審議の経過を踏まえて発展的に審議が進められた。そして、これからの時代に求められる国語力について確認し、それを身に付けるための方策として、読書活動と国語教育に絞って検討を深めることとした。読書活動等小委員会と国語教育等小委員会を設置して、それぞれの委員会において検討を重ね、それをもとに答申案をまとめた。

答申の構成

(1) 国語の果たす役割と国語の重要性について
(2) これからの時代において求められる国語力とその具体的目安
(3) これからの時代に求められる国語力を身に付けるための方策
　①国語教育の在り方
　②読書活動の在り方

■国語の果たす役割と国語の重要性

まず(1)については、①個人にとっての国語、②社会全体にとっての国語、③社会変化への対応と国語、の三点に整理して、国語の果たす役割と重要性を確認した。①では、個人にとって国語は、知的活動の基盤、感情・情緒等の基盤、そしてコミュニケーション能力の基盤を成すものであり、生涯を通じて個人の形成にかかわるものであることを指摘した。②については、国語が文化の基盤であり、中核であることを明記し、社会生活の基本であるコミュニケーションは国語によって成立することを確認した。③では、価値観の多様化、都市化、少子高齢化、あるいは国際化、情報化などの進展により国語の果たす役割がいよいよ重要になっていることを指摘した。

以上のように考えた時、国語の重要性はいつの時代においても変わるものではないが、「これからの時代」においてはその重要性は一層増大してくる。つまり、都市化、国際化による見知らぬ人や外国人の増加、少子高齢化や核家族化による家族関係の変容、情報機器の増加による伝達様式の変化などにより、意志疎通において、これまで以上の国語力が求められるようになる。少子高齢化や核家族化による家族関係の在り方が変容し、家庭における言語教育力が低下していると言われていることも問題である。さらに、人間として持つべき感性・情緒を理解する力が欠けていると見られるのも問題である。

■これからの時代に求められる国語力

(2)については、「国語力」を国語の中核を成す領域と「国語の知識」や「教養・価値観・感性等」の領域の二つに分けてとらえることとした。前者は、言語を中心とした情報を「処理・操作する能力」としての「考える力」「感じる力」「想像する力」「表す力」

の総合体であり、後者は、前者の力が働くときの基盤を成すものである。後者のうち、「教養・価値観・感性等」は国語力によって形成され前者の諸能力の基盤にもなるものであるが、それだけでなく、すべての活動の基盤となるものであり、「人間として、あるいは日本人としての根幹にかかわる部分」でもある。この点を明示することができたのも本答申の意義の一つである。

国語力を構成する諸能力をこのように捉えた上で、これらの諸能力は、日常の言語生活においては、「聞く力」「話す力」「読む力」「書く力」として働くことになるので、この四つの力のそれぞれについて具体的な目標を示すことにした。なかなか難しい問題で、日本人の成人としてここまでの国語力は身に付けたいという、具体的な目安を一つの参考として示したものであるが、こういう形でまとめて提示することができたのも、意義の一つであろう。

■これからの時代に求められる国語力を身に付けるための方策

最後に、しかし、最も重要なことは、(3)のこれからの時代に求められる国語力を身に付けるための方策である。国語力の向上で大切なのは、一人一人が個人としての国語力を向上させたいという意欲を持つことである。そのことを前提として、今後、行政が中心になって取り組むべき方策として、特に「国語教育の在り方」と「読書活動の在り方」を取り上げ、答申をまとめることができた。

●国語教育の在り方

まず国語教育の在り方について、基本的な認識として、①国語教育は、学校だけでなく、家庭、社会全体の課題であること、②情緒力・論理的思考力・語彙力を育成すべきこと、③「自ら本に手を伸ばす子供」を育てること、④発達段階に応じた国語教育をすべきこと、などを提言した。いずれも重要な提言であるが、③は、「読書活動の在り方」にも共通する事項である。②の情緒力はいささか耳慣れないことばであるが、人間として持つべき感性・情緒を理解する力、社会的・文化的な価値にかかわる感性・情緒を自らのものとして受けとめ、理解できる力である。論理的な思考を適切に展開していくときの基盤となるのが情緒力であるとして、情緒力の育成の重要性を提言したのである。

学校における国語教育について、⑤国語の教育を学校教育の中核に据えて、全教育課程を編成することが重要であること、小学校段階は国語力の向上に特に重要な時期なので、授業の在り方を見直した上で、授業時間を大幅に増やすことも考える、⑥「聞く」「話す」「読む」「書く」を有機的に組み合わせて指導する、そのためには、演劇を授業に取り入れることも有効である、⑦国語科教育の大きな目標の一つは、情緒力と論理的思考力の育成にある、それぞれの力を育成することを中心として、「文学」「言語」の2分野に整理するなど、教科内容をより明確にする、⑧小学校段階では、「読む・書く」に指導の重点を置く、「聞く・話す」の指導については、すべての教科で一層意識的に行っていく、⑨音読や暗唱を重視し、古典に触れさせるようにして、日本語の美しさやリズムを身に付けるようにさせる、⑩小学六年生までに常用漢字の大体が読めるようにすることなども視野に入れて、漢字指導の在り方を検討する、⑪現職教員の研修や採用以前の配慮によって、国語科以外のすべての教員の国語力を高めるようにする、などの提言をした。これらの提言は相互に関連するものであり、小学校段階では大幅に授業時間を増やし、「読む・書く」に指導の重点を置き、情緒力・論理的思考力・語彙力の育成をすべきであるということである。

●読書活動の在り方

次に、読書活動の在り方については、学校における読書活動推進の具体的な取り組みとして、①学校図書館の図書を整備するとともに、読書に関して子供たちの話し相手、相談相手になる人が常にいる体制を作る、②読書活動は、国語科だけでなくすべての教科で取り組み、読書習慣を身に付けさせるために、小学校段階からの継続した読書指導をする、③学校教育の中で、読書自体が楽しくなる読み方を教え、なぜ読む必要があるかを考えさせる、教員の果たす役割がきわめて重要であり、学校と家庭が連携した読書指導も大切である、④子供たちが読む本の質的・量的な充実が大切であり、自ら本を手に取る気持ちになるように教科書等の内容を見直したり、子供たちの読める本、読みたくなる本を出版したりすることが必要である。

そして、家庭や社会における読書活動推進の具体的な取り組みについて、⑤小学校入学前に家庭や地域で絵本等の読み聞かせをする、それらの具体的なやり方の情報交換や情報の共有化が大切である、⑥国や地方公共団体は、読書環境の整備の状況を情報公開し、整備計画の数値目標を示して、住民や保護者の評価を受けることが望ましい、などの提言をした。

■おわりに

この答申では、かなり大胆かつ斬新な提言をすることができたと思う。今日ほど国語力の向上が強く求められている時代はない。国語力の向上のためには、学校が地域や社会と連携して、「自ら本に手を伸ばす子供を育てる」ことが何よりも大切だというのが、本答申を貫く基本的な認識である。

知っておきたい
教育NOW②

学校選択制の導入を教育の活性化にどう生かすか

東京学芸大学教授　葉養正明

■教育の自由化論の発生

学校選択制が話題になってだいぶたつ。振り返れば、本格的に学校選択制が議論され始めたのは、昭和59年に総理府に設置された臨時教育審議会においてであった。同審議会の「21世紀を展望した教育の在り方」を審議した第一部会を中心に教育の自由化論が展開され、それに消極的な第三部会との間で激しい応酬があったことが知られている。第三部会は、「初等中等教育の改革」を審議事項としていた。

この間の経緯は、次のように説明されている（教育政策研究会編著：臨教審総覧＝上巻、第一法規、昭和62年、pp. 23～24）。

いわゆる「教育の自由化」は、戦前・戦後の教育を通じて、我が国近代教育が本格的に取り組んだことのない自由、自律の価値を中心にすえて、「理念のレベル」と「手段のレベル」の両面にわたり積極的に検討し進められるべきであるという意見と、これに対して、「教育の自由」あるいは「教育の自由化」という言葉はあいまいであり、親、教師が子供を教え育てるという本質に照らして、これらの言葉は理解できないなどの意見があった。しかしながら、戦後教育においては、いずれかというと「教育の機会均等」の実現を目指すあまり、「平等」の概念が強調され過ぎ、個性の尊重、自律、自己責任というような「自由」の概念が軽視されてきたきらいがあり、今次教育改革の目指すべき基本方向として、教育における個性の尊重、個人の尊厳を、人格の完成のために欠くべからざるものとして掲げることが必要であるという点では、ほぼ共通の認識がなされた。

このような経緯を経て、昭和62年に公表された第三次答申では、「初等中等教育の改革」の一環として学校選択制の導入がうたわれた。「通学区域」をテーマとした箇所では、「現行の市町村教育委員会の学校指定の権限は維持しつつ、各教育委員会が地域の実情に即し、可能な限り、子どもに適した教育を受けさせたいという親（保護者）の希望を生かすための工夫を行う方向で改革するとともに、様々な改革プログラムの総合的検討を進める」という提言を含んでいる。

■転機となった行政改革委員会第二次意見

ところで、この臨教審答申が実際に動き出すのは答申の約10年後の、平成9年あたりからである。そのきっかけになったのは、平成8年12月に首相宛提出された「行政改革委員会第二次意見」であった。同意見では、教育を受ける側の選択機会を拡大する観点から、学校選択の弾力化がうたわれた。

そして翌年の1月、文部省初等中等教育局長通知「通学区域制度の弾力的運営について」が都道府県・市町村教育委員会に宛てて出されることとなった。

この通知をきっかけに、全国各地で試みられてきた通学区域の弾力化策が続々と表面化することになる。従前から、地域の各種事情があって調整区域の設定など通学区域の弾力化措置を採用してきたケースが、一挙に表面化したという感じが強いといわれる（あるマスコミ関係者の談）。

同時に、東京都品川区や三重県紀宝町などでは、「学校選択の自由化」や「通学区域の撤廃」をうたい文句とするケースが登場し、小・中学校の場合には指定された学校に通わせるものという観念が長らく抱かれてきた世間に対し、大きな衝撃を与えた。

以来、すでに5～6年を経過することになるが、学校選択制そのものは首都圏のみならず全国各地に徐々に拡大しつつある状況が見られる（筆者の調査では、検討中も含めると、学校選択制に前向きに取り組んでいる自治体は、複数の学校が配置されている自治体の約半数に及ぶ）。では、これまでのところ、新しい制度導入の効果や弊害はどのように現れているだろうか。

■学校選択制導入はゴールか、あるいは手段か

前述のように、学校選択制と呼ばれる仕組みが発生してほぼ5年程度経過した。各地の実態から、この仕組みの持つ意義や課題はかなり明らかになってきた、といってよいようだ。

最初に結論的に述べてしまえば、その意義や課題は、学校選択制を導入した自治体に次のような二つのタイプが明確に区別できるようになってきたことに対応している。つまり、学校選択制導入で学校教育に大きな変化を引き起こすことに成功している自治体と、学校選択制を導入したものの、学校教育そのものにはさしたる変化は現れていない自治体とに分かれる傾向である。

学校選択制の導入が「学校を変える」ことにある

とすれば、前者では導入が成功した、といえる。しかし、後者の場合には、多くの課題を含んでいる、と見てよいことになる。前者に該当する典型は、東京都品川区や足立区であり、後者には、その他の多くの自治体があてはまる。では、なぜこのような結果が生じているのだろうか。

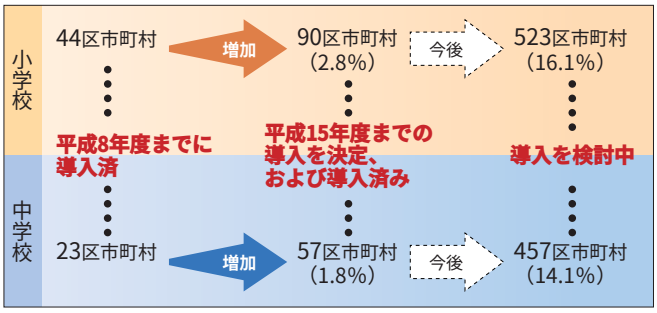
東京都品川区の学校選択制は、前述の文部省通学区域弾力化通知後、平成10年度から導入が進められたものだが、同区の特色は、学校選択制が「プラン21」と銘打った教育改革プランのなかに位置づけられている点に見られる。言い換えれば、学校選択制をゴールではなく手段の一つと考えている、ということである。それもあって、同区では学校選択制導入に続き、特色ある学校づくり、学校評価、一斉学力テストなど数々の改革に着手している。

現在、同区教育委員会は、平成18年度からの小・中一貫校のたちあげに大きなエネルギーを注いでいるが、それも学校選択制導入に随伴する方策と見ることができる。つまり、「特色ある学校」づくりである。

その他、小・中学校を対象に、ブロックを設けない全区学校選択制を導入した東京都足立区の場合にも似通った点がある。区立五反野小学校は、平成12年同区「開かれた学校」モデル校第一号に指定されたことに続き、平成15年には、全国で初めて同校に公立小学校設置の学校理事会が設置された。こうして、同区の改革も学校選択制導入だけにとどまってはいない。教育委員会は、五反野小学校の在り方を区立学校全体に広げる方針と伝えられる。その他、平成16年度からの2学期制の導入など改革メニューの豊富さは品川区に決して劣らない。

他方、学校選択制をいち早く導入したものの、「改革」としてはそれのみで、その後の選択制活用者数は横ばいか、取るに足らない数にとどまっており、「学校の変化」という視点からしたらさしたる効果が現れているようには見えないケースもある。

こうして見てみると、学校選択制がどのような意義を持つかという問いは、学校改革プランのなかで学校選択制をどう位置づけているか、つまり、ゴールと考えているのか、改革方策の一つと考えているのかによって、答え方が大きく異なってくることがわかる。



全国自治体における学校選択制の動向（平成13年11月現在）

■「質の高い学校」(Quality school)づくりをどう進めるか

学校選択制導入時の激しい議論も沈静化した今、静かに振り返ってみると、学校選択制とはそもそも何であったのだろう。あるいは、そもそも教育改革とは何を目指すものなのか。

学校選択制導入時には賛否両論激しい議論が交わされたが、この仕組みの「可能性」と「懸念」として語られてきたのは大部分が単なる「思い込み」であったことに気づく。例えば、この仕組みへの反対論として、学校の序列化が語られた。しかし、純粋にこの仕組みの効果として「序列化」は生じているのか。一部の学校に就学希望者が集まっているのは、この仕組みの効果であるというよりは、これまで形成されてきた「学校の序列」意識が選択結果に現われた、と考えた方が真実に近いのではないか。あるいは、むしろ、この仕組み導入で他校に子どもがとられることに危機感を抱いた学校の努力によって、実際の教育格差は小さくなっているといった方がいいのではないか。

他方、学校選択制の効果として、「特色ある学校づくり」の促進や教職員の職務意識の高揚などが表明されてきたが、それも結局は「幻」に過ぎなかったのではないか。東京都品川区のように「特色ある学校づくり」が進んでいるのは、選択制の効果であるよりも、学校予算の重点配分など「特色化」プログラムそのものの効果といった方がよいのではないか。

また、教職員が子どもの数を意識し始めたように見えるのは、選択制そのものの効果であるよりも、東京都教育委員会が採用し始めた人事考課制度など別個のプログラムの影響の方が大きいのではないか。

こうして考えてくると、学校選択制という仕組みそのものは、他の改革プログラムと一体化したとき初めて大きな効果を発揮するもの、といってよいように思われる。学校選択制とは、つまり、改革メニューの一つにすぎないと考えるべきで、それをどう活かしどのような改革を起こすことが目指されるべきかが問題なのである。

前述したように、学校選択制を導入しても、「学校を変える」という視点からしたらさしたる効果を挙げていないように見えるケースも少なくはない。しかし、反面で、では「学校が変わった」から効果を挙げたととらえられるべきかといえば、「変わった方向」が問われることになる。

こうして、通学区域の弾力化にしても、学校選択制にしても、そのあり方を考え、あるいは、その仕組みの効果をとらえる原点は、「質の高い学校」をどう生み出すのに役立っているかに求められる。その際、「学校の変化」の方向をモニターする仕組みや努力が重要になることはいうまでもない。

有田和正のおもしろ授業発見！④

ランプ一つで「昔のくらし」を考えさせた実践

― 森田文恵先生のみごとな教材さがし ―

教材・授業開発研究所代表　**有田和正**

1．ユニークな教材さがし

研究授業で３年生の社会科「昔のくらし」の学習に取り組むことにした森田文恵先生（伊丹市立伊丹小学校）は、昔の道具を使って授業をしたいと考えた。洗濯板などをよく使っているが、ほかにもっとユニークなものはないかと考えた。

博物館などをまわってみた。図書館にも行ってみた。しかし、「これだ」というものがみつからない。

考えに考えた末、「ランプと蛍光灯の明るさを比べてみたらどうか」と思いついた。それで、早速、ランプさがしを始めた。

ところが、伊丹市のどこをさがしてもランプがみつからない。博物館にもない。心当たりのあちこちにも電話をかけた。しかし、手がかりは全くなかった。

あきらめかけた時ひらめいたのは、ちょうど年末にさしかかっていたので、年賀状を兵庫県の田舎の方へ出して、ランプが残っていないかたずねてみようというアイデアだった。すぐに年賀状を３００枚買い足した。

そして、電話局へ行き、兵庫県の北の方の田舎の電話帳を借りてきた。これを見て、手あたりしだいに３００人に、「ランプを持っていませんか？　もし、お持ちでしたら、社会科の学習に使うので貸してください」という年賀状を書いた。もちろん、連絡先も書き添えた。

３００枚出して、そのうちたった一人、「ランプを持っています。必要ならお貸ししますので、家までおいでください」という返事をいただいた。

森田先生は、冬休みに小さな子ども３人を車に乗せて、ランプのあるその家をたずねた。ぐずる子どもをあやしながらあちこち走り回って、ようやく目当ての家にたどりついた。その時のうれしさは言葉では表せないといっていた。なぜなら、半年もかけてやっと念願のランプがみつかったからである。

こんなユニークな方法で、ついにランプを入手することができた。これこそ社会科教師のお手本である。

2．ランプみがきは子どもの仕事？

ランプはかなり古いもので、真っ黒に汚れていた。みがこうと手を入れようとしたが、大人の手は入らない。そこで、子どもに手を入れさせたところ、すーっと入る。そうだ、昔はランプをみがくのは子どもの仕事だったのだ、とひらめいた。

自分の子どもにピカピカにみがかせた。みがいている様子を観察しているうちに、ひらめきが実感に変わったという。

授業当日、汚れたランプを一人の先生がみがこうとしてみたが、手が入らないことがわかった。左の写真がそうである。

「一体、どうしてみがいたのだ」と、この先生は「はてな？」をもった。この「はてな？」は、授業の中で子どもによって解決された。

3．ランプは明るい？

授業は、暗室で行われた。子どもたちは「どうして？」という表情で部屋に入ってきた。

授業が始まった。先生はさり気なく電気を消し、部屋を真っ暗にした。参観者もみんなびっくりしたが、子どもたちの驚きは大きかった。悲鳴をあげる子どももいた。

ころあいをみはからって、先生はマッチをすり、ランプに点火した。

その瞬間、子どもたちは歓声をあげた。下の写真にその時の様子がよく出ている。ランプは教室の真ん中にさげられた。

子どもたちは、「ランプって明るいね」という。「昔の人は、このくらいの明るさで生活していたのだね」という。

子どもたちの反応は、「ランプは結構明るい」ということだった。森田先生は「家」という字を紙に書いてランプの光で読ませた（写真上）。

読める。だから明るいというのである。

このあたりの演出が実にうまい。

つまり、真っ暗な中でランプをつければ、かなり明るく感じる。子どもたちにそう思わせたのである。

わたしは、かなり暗いと思ったけれど、子どもたちは先生の演出にのせられて「明るい」というのである。

ランプの光の中でおしゃべりをしてみる、じゃんけんをしてみる、トランプをしてみる、教科書を読んでみる、ノートに字を書いてみる、ポケットゲームをしてみる……。

このように森田先生は子どもたちに様々な活動をさせ、ランプ生活を楽しませた。次の写真は、その活動のシーンである。

この計画が実にすばらしい。

子どもたちに、ランプで何とか生活できると実感させるためである。

4．電気は明るいなあ！

ランプの中での活動をしばらく続けた後、突然、ランプを消した。再び真っ暗闇である。

次はどうするのだろうか、と子どもたちに考えさせる間をとった。しばらく暗闇のままである。

こうしておいて、突然、蛍光灯がつけられた。子どもたちは、「明るい！」「明るい！」と大騒ぎである。

ランプの明かりに慣れた子どもは、蛍光灯の明るさに驚くのである。

「ランプに比べて蛍光灯はどうですか？」と先生が問う。

- 問題にならないくらい明るい。
- ランプが明るいと思ったけど、蛍光灯はその何倍も明るい。
- 昔の人は、暗い中で生活していたことがわかった。
- ランプは、家族がランプのところに集まらないといけないのに、蛍光灯は明るいので家族はバラバラでも、何でもできる。
- 昔の人はランプのところに集まって、家族みんなで食事をしたり、話をしたり、なかよくくらしたのではないか。
- 今の人はバラバラでも生活できるから、本当に幸せかどうかわからない。
- ランプは火事になったりすることもあったのではないか。油を使っているから油をこぼしたりして……。

子どもたちの考えは、なかなか鋭いものであった。先生の演出も子どもたちのすごい考えを効果的に引き出したといえる。

次に、森田先生はランプのほやをはずして、すすで黒くなっていることに気づかせた。

そして、「明るいランプにするには、どうしなければならないか」と考えさせ、ほやをみがく必要性に気づかせた。

「では、先生がみがいてみましょう」といって手をほやに入れようとしたが、入らない。子どもたちは「大人の手じゃだめだ！」という。

「では、誰がみがいたのだろう？」と問う。

「子どもしかだめだよ。子どもがみがいたと思う」という。

「そうすると、ランプみがきは子どもの仕事だったんだね。昔の子どもは、手伝いしなければならなかったようですね」。

「もし、子どもが怠けてみがかなければ、暗くて家族みんなが困りますね」。

子どもたちは、昔の子どもたちは手伝いをせざるを得なかったことに気づき、今の自分たちは何もしていないことにも考えが及んでいった。

ランプ一つでこんなすばらしい社会科授業ができるのである。教材がいかに大切かを学んだ授業であった。

3R（スリーアール）学習へのご招待

経済産業省の3R学習支援プログラム

経済産業省産業技術環境局
リサイクル推進課長
井内　摂男

3Rとは何か

3Rとは、リデュース（ごみを減らす）、リユース（繰り返し使う）、リサイクル（再び資源として利用する）のことです。これらの三つの言葉の頭文字がRであることから「3R（スリーアール）」と呼んでいます。この「3R」は、現在、日本が直面している資源問題、ごみ問題、そして環境問題を解決しながら同時に経済成長を遂げていく、環境と経済が両立した「循環型社会」を形成していくためのキーワードです。

循環型社会形成に向けた最近の動き

最近、これら3Rや循環型社会といった言葉が、ようやく社会でも周知されてきました。全国各地でごみの減量や資源回収等の3Rの取組みがなされ、企業も環境に配慮した製品やサービスを積極的に提供し始めています。また、ペットボトルや紙・プラスチック製の容器包装、テレビや冷蔵庫等の家電製品、パソコンや自動車といった様々な品目について、リサイクルを促進するための法制度が順次整備され、確実に成果をあげてきています。

(財)クリーン・ジャパン・センター
http://www.cjc.or.jp/support/

循環型社会形成と国民の役割

循環型社会の形成には、国民（消費者）、事業者、そして国や地方自治体等の行政が互いに協力し合い、それぞれが適切な役割を果たしていくことが不可欠です。とりわけ、家庭から出るごみを分別し、回収ルートにのせ、リサイクル費用を最終的に支払う国民の役割は重要です。また、国民が、リサイクルにより再生された資源を利用したリサイクル製品を積極的に購入することも、循環の「環（わ）」を廻していくために必要なことです。つまり国民の理解と協力、実行があってこそ、循環型社会は成り立っていくのです。

●「3R学習支援プログラム」を活用したモデル授業

経済産業省の3R学習支援プログラム

このため、国民に循環型社会形成の必要性や自分達の役割について正しく理解してもらい、暮らしの中で3Rの取組みを実行していけるよう、環境や3Rに高い意識を持った国民の育成が重要な課題となっています。

そこで、経済産業省では、地域や学校における

3R学習を支援するため、平成一三年度から財団法人クリーン・ジャパン・センター（以下CJC）と協力し、地域3R支援事業（旧 環境リサイクル学習支援事業）を実施しています。

具体的には、3Rに豊富な知見を有する企業等の専門家を紹介する「3R講師派遣プログラム」、環境・リサイクル活動に積極的に取り組む工場等を紹介する「3R体験学習プログラム」があり、現在、全国一六〇名の講師、六〇〇カ所の事業所に登録いただいています。CJCのホームページで、お住まいの地域の講師や事業所の検索ができるようになっています。

また平成一五年度には、地域の環境リーダーや学校の先生が、地域や学校で3Rについての授業や指導を実施する際に活用いただけるよう「容器包装」と「パソコン」の二種類の3R教材を専門家と共同で開発しました。これらの教材は、「3R」だけでなく「もの作り」の教材として、技術科、家庭科、理科等の授業でも活用が可能です。貸し出しは平成一六年五月以降の予定です。

これらの教材やプログラムを組み合わせて利用することで、様々な3R学習が展開できます。

●容器・包装の原料やリサイクル製品を実際に見て触れることができるサンプル教材
ペットボトル（左）とアルミ缶（右）

●本物の使用済みパソコンを利用し、パソコンメーカーの協力の下、製作した分解可能なパソコン模型。

●生徒が模型を安全に解体し、簡単に部品が取り出せるよう、各所に工夫や特別な加工がなされている。

①容器包装リサイクルの教材

この教材は、家庭から排出されるごみの約六割を占める容器包装の生産・消費・分別・リサイクルまでの一連の流れを理解するための教材です。アルミ缶、スチール缶、ペットボトル、紙製容器包装、プラスチック製容器包装、ガラスびん、計六種類のサンプル製品、補助教材（フリップ、ワークシート等）、指導手引書（教師・指導者用）がセットされています。

②パソコンリサイクルの教材

情報化社会を迎え、家庭や職場にパソコンが今後さらに普及し、それと同時に廃棄されるパソコンの量も増加していくものと予想されています。平成一五年一〇月より、家庭で使用済みとなったパソコンは、メーカーが回収してリサイクルすることになりました。この教材は、パソコンには再生可能な貴重な資源が含まれており、リサイクルの必要があること、またリサイクルを進めていくには、国民（消費者）の役割が重要であることを学習するための教材です。分解可能なパソコン模型に、補助教材、指導手引書（教師・指導者用）がセットされています。

3R学習のすすめ

3Rは、「ごみを減らし、資源やものを大切に使う」という誰にとっても身近で受け入れやすい考え方であり、地域や学校においても比較的取り組みやすいテーマの一つです。また環境問題にとどまらず、消費生活、国際関係、資源・エネルギー、経済・産業等、他分野の学習への発展の可能性も有しています。

この機会に、各学校でぜひ3R学習に取り組んでいただきたいと思います。またその際、経済産業省の3R学習支援プログラムを大いに活用していただきたいと願っています。

★経済産業省　リサイクル推進課
〒100-8901　東京都千代田区霞が関1-3-1
ホームページ　http://www.meti.go.jp/policy/recycle/
電　話　03-3501-4978

★3R学習支援プログラム　教材の貸出しに関する問い合せ先
（財）クリーン・ジャパン・センター　地域3R支援事務局
〒105-0001　東京都港区虎ノ門3-6-2
電　話　03-3432-6301
FAX　03-3432-6319

■ 山形県 ■

学校図書館を生かし、教育改革をめざす

鶴岡市立朝暘第一小学校校長
竹屋哲弘

本校は平成15年6月、全国図書館協議会から図書館活用教育の実践を高く評価いただき、「学校図書館大賞」（28年ぶりの授賞、3例目、小学校では初）の栄誉に浴した。図書館の機能を学校全体に広げ、教育の質を高めるために、学校・保護者・地域が連携して教育の充実に取り組んでいるが、実践活動に対する大賞授賞は全国初とのことである。

特色は、①図書館活用教育を学校経営の中核に据えている、②校内組織・推進計画を整え、継続的・研究的・組織的に実践している、③単なる読書のすすめではなく、本を仲立ちに子どもの人間関係を広げるコミュニケーションとしての読書活動で心を育てている、④図書館で授業に使える情報リテラシーを育てている、⑤図書館を活用した授業で生きる力を育てている、⑥保護者・地域との連携の中で進め、子ども文化づくりにつなげている、などである。

活動例を挙げると、子どもたちのさまざまな学校生活の場に読み聞かせを取り入れ、感動を共有する集団づくりをめざし、本を媒介にしたコミュニケーションの場の広がりを図っている。子どもたちにとって、人とのかかわりを通して本と出会うことは、その人と本から丸ごと影響を受けることであり、自己形成の大切な過程となっている。

私は本校のような図書館活用教育の組織的・多面的な取り組みがぜひとも広がってほしいと願っている。学校図書館の教育的意義を再確認し合いながら、図書館を十分に活用し、授業や教育諸活動の改革・改善を全国的に積極的にすすめるべきだと強く思う。

＊なお、本校の図書館活用教育の詳細については、『こうすれば子どもが育つ 学校が変わる』（国土社）、『図書館をつくる 教育を変える』（全国学校図書館協議会）、『図書館を生かす 学校が変わる』（スクールライブラリー・ビデオシリーズ、紀伊國屋書店）をご参照ください。

■ 青森県 ■

こころのふるさと　白銀
～共育の精神で：戦争体験を語る会～

八戸市立白銀小学校校長
本堂勝子

本校は、太平洋を臨む港町に位置し、まもなく創立130年を迎える学校である。

校歌にもうたわれているように、「子に勝る宝なし」の考えに立ち、学校・家庭・地域が手をとり合って学社連携・融合教育を推進している。

具体的には、生活科・総合的な学習の時間に行われる「ふるさと白銀」のテーマ学習や国語の書写、クラブ活動等において、保護者の方々のみならず、公民館で活動している地域の方々と、共に子どもを育て、子どもと共に育つ教育活動を実践している。

その中の一つが、6年生で行っている「戦争体験を語る会」（写真）である。これは4年前から、地域の日本赤十字社の方から協力していただき取り組んでいるものである。

子どもたちが生まれ育ってきたこの白銀の過去を知り、平和の大切さ・いのちの尊さに思いを新たにし、今日の自分・今日の白銀があることへの感謝の心を培い、これからの自分の生き方を考える時間となっている。小グループに分かれて聞く実体験に基づいたお話は、子どもはもちろん、戦争を知らない保護者にとっても、心に深く染み入るものがある。

1年生のときから「ふるさと白銀」をテーマに、白銀の町の自然や社会、文化などについて、そこに住む人々とふれ合いながら学び続けてきた子どもたち。この子どもたちが、生まれ育った白銀の地を離れて暮しても、この白銀で学び暮したことが、子どもたち一人一人の心の原風景としていつまでも残り、共に生きていくエネルギーとなることを願っている。

学校・家庭・地域の三者による〈共育（きょういく）〉は、共に生きる力を育む豊かな土壌となっている。

■ 高知県 ■

情報を見きわめ、自分の意志をもって生きる力を育てる

高知市立旭東小学校校長
池田律子

平成12年度3学期、卒業目前の6年生103名と学年団教員が、鈴木敏恵先生（千葉大学）のご指導のもと、TVプロジェクト「21世紀のテレビはこうなってほしい～私たちの願い～」に取り組んだ。

21世紀を生きる子どもたちには、情報を見きわめる力、すなわちメディアリテラシーを身につけ、自分の考えや判断力を持ち、確かな人生を生きる力を身につけてほしいという願いで、全35時間のプロジェクトを組んだ。

プロジェクトの進行に合わせて、鈴木先生は何度も来高され、授業に加わり子どもたちに直接かかわってくださった。子どもたちの話に耳を傾け、「何の目的で何をやろうとしているのか」を絶えず問いかけ続ける先生の姿に、子どもたちも教職員も、多くの刺激と示唆を受けた。

また、この実践を通して、プロジェクト学習の進め方やポートフォリオを活かした評価のあり方なども学んだ。さらに、学習の成果をプレゼンテーションや映像・提言集などの多様な方法を用いて社会に向けて発信し、自分たちの考えを聞いてもらうとともに、保護者や地域、行政機関、団体や企業などからの評価をもらうなど、多くのことを目のあたりにし、その後の本校の総合的な学習の進め方を決定することになった。

この出会いから3年、平成15年度には、3年生では「地域」、4年生では「環境保全と美化」、5年生では「食」、6年生では「自然（木）を生かした生活」というプロジェクト学習を実施し、教師も児童も総合といえばどのように学習を進めるのかがわかり合えるようになった。16年度も、子ども自身が学習に「意志」を持つことを大切にして、それぞれのテーマ（ゴール）を決めて総合をスタートさせたいと考えている。

■ 大阪府 ■

「おやじ」の井戸端会議

豊中市立第十四中学校「おやじの会」世話人代表
田村　格

「おやじ」が学校に集まる。土曜の夜、娘や息子が通う中学校の校長室に普段着の「おやじ」が集まる。校長先生はじめ先生方をまじえて、子どものこと、学校のこと、家庭のこと、地域のこと、時には楽しく趣味や遊びのことをワイワイ・ガヤガヤと話し合う。また、たまには教育問題について口角泡を飛ばしながら真剣に議論をする。まさに「おやじ」の井戸端会議である。そんな中から数々の提案が生れ、学校や子どもたちと一緒にボランティアで活動する。

そんなわが「おやじの会」は、地域にある神社の夜祭を子どもたちが安心して楽しめるようにと始めた巡視活動から自然発生的に誕生した。12年前のことである。

今でも、夏と秋祭りの巡視は続いている。以前は多くの子どもたちが行きたくても怖くて近づけなかった夜祭だったが、近頃では可愛い浴衣姿の女の子も大勢集まるようになった。毎年、輪投げの店を出すオバチャンとも顔なじみになり、おやじたちにも楽しい活動の一つになっている。その他、通学路のクリーン作戦、校庭整備や校内菜園造り、バーベキューや焼き芋大会、校門の階段造りやウォータークーラーの修理など、活動はすべて学校を中心に子どもたちと一緒に行っている。

わが「おやじの会」は、活動そのものよりも活動を通じて「おやじ」が子どもたちとふれあい、学校や先生とかかわり、地域と接することを第一目的としている。仕事中心で地域や子どもから孤立していた「おやじ」が学校や子どもに関心を抱くようになり、転勤族の「おやじ」にも地域住民との交流の輪ができてくる。

活動は地味だが、子どもや学校を思い、地域を愛する「おやじ」が一人でも増えることを願って、「おやじの会」の活動は続く。

BOOK REVIEW

水谷 修『夜回り先生』（サンクチュアリ出版）

闇の中の子どもとの「出会い」の記録

評者　飯田浩之（筑波大学）

「夜回り先生」は、夜間高校の勤めを終えると夜の街へと出かけていく。そこで、たむろする子どもたちに声をかける。シンナーに溺れた子、暴走族に取り込まれた子、リストカットを繰り返す子、いじめられている子、犯罪に手を染めてしまった子……「夜回り先生」は、そうした子どもたちの話し相手になり、彼ら・彼女らが、好むことなく置かれた状況から逃れられるよう手助けする。共に問題に立ち向かい、より幸せに生きられる道を探っていく。

「夜回り先生」の「夜回り」は、12年間続いている。子どもたちとの出会いの数は、5000近くになるという。本書には、そうした出会いの幾つかが、先生自身の生い立ちと重ね合わされて描かれている。幸せにつながった出会い、悲しみに終わった出会い、一時の出会い、久しく関わり合うことになった出会い。先生は、自ら出会いを求めて夜の街に出かけていく。闇の中の子どもたちに声をかける。なぜ？

先生は、子どもたちの寂しさを知っている。自らの寂しさと子どもたちの寂しさが共鳴する時、寂しさが暖かさに変わることを信じている。先生は、子どもたちの可能性を知っている。「花の種」は、植えた人間がきちんと育て、時期を待てば、必ず花を咲かすことを信じている。だから、先生は、そんな子どもたちを地の底に突き落とす大人の悪を憎んでいる。そうした悪に、真っ正面から挑んでいく。

どんな子どもも生きていって欲しい。シンナーに溺れた子も、犯罪に手を染めた子も、自室に引きこもってしまった子も……。「いいんだよ」「昨日までのことはみんないいんだよ」と言いながら、「夜回り先生」は、子どもたちが生きることを願っている。

それにしても、もどかしい。本書を読む私に何ができるのか。「夜回り先生」が子どもたちに声をかける一方で、社会は、子どもたちを次々と夜の闇に沈めていく。責任ある大人として私たちが何を考え、何をしなければならないのか。本書は、厳しく問いかける。

村上 龍『13歳のハローワーク』（幻冬社）

「好き」から選ぶ職業百科

評者　武内 清（上智大学）

〈いい学校を出て、いい会社に入れば安心〉という時代は終わりました。好きで好きでしょうがないことを職業として考えてみませんか？　いろいろな『好き』を入り口に514種の職業を紹介」という本の帯通りの内容である。

村上龍の作家としての鋭い洞察力、自分の体験、そして若い世代への熱いメッセージが、絵入りで大判454ページの本の中に満載されている。さながら職業選びの百科全書である。これから職業を考える13歳だけでなく、様々な世代、教育関係者にも広く読まれ、ベストセラーになっている。

仕事の種類が職業領域からではなく、好奇心の領域から引けるようになっている。「花や植物が好き」「雲や空や川や海が好き」「外国語が好き」「音楽が好き」「人の役に立つのが好き」など29種類の「好き」があげられる。例えば「音楽が好き」という項目をみると、音楽タレント、歌手、指揮者からクラブDJまで37の職種が紹介され、それぞれの職業の内容や魅力、必要な才能や経歴、就ける可能性について、具体的に説明されている。「人に役立つのが好き」で「教師」を目指す人には、「自分で人生を充実させ、楽しんで、その上で、子どもと接してもらいたい」というアドバイスも添えられている。

自分の好きなことを起点に将来の職業を選択しようという本書のコンセプトは、これまでのキャリア教育とも共通するものであり、教育関係者が読んでも違和感がない。かえって、現代の新しい職種が詳細に解説されているので、進路指導に大いに役立つ。

いくつか気になる点もある。①自分の好きなことを職業にできる人はそれほど多くない。好きなことは仕事ではなく、余暇にとっておくという選択肢もあるのではないか。②職業は生活の糧を得るためということが軽視されていないか。好きが強調されると、いつまでも自分の夢を追いかけるフリーターが増えるのではないかなど。

大人と子どもが将来の進路や職業をめぐり、様々な議論ができる本である。

「知」を創る学習指導

―その❸ 人との関わりによる知の獲得

角屋重樹（広島大学教授）

子どもが創造し、獲得していく知には、創られた知と知の創り方に関するもの、および人との関わりによる知、の三つの要素があり、前回は知の創り方を取り上げ、それについて述べてきました。今回は、人との関わりによる知の獲得を考えてみましょう。

人との関わりによる知の獲得は、同年齢同士の関わりとエキスパートなどの異年齢との関わりによるものの二つに大別できます。

① 同年齢同士の関わりによる知の獲得

前回と同様に、「植物の成長には日光や肥料などが関係していること」という知を創ることをねらいとする小学校理科第5学年A(1)ウの学習内容を例にすると、次のように説明できます。この学習では日光が植物の成長と関係があると考えそれを調べるグループと、肥料が植物の成長と関係あると考えそれを調べるグループとに分かれて追究していくことが多いようです。それぞれグループごとに分かれて日光や肥料などの植物の成長に対する影響を調べ、最後に、各グループの実験結果を報告し合います。

このように、それぞれ別の要因を調べたグループ同士が関わることを通して、お互いの実験結果の価値を認め合い、各グループが自分のグループが調べていない要因についての知を獲得していきます。

② 異年齢との関わりによる知の獲得

また、人との関わりによる知という場合、エキスパートなど異年齢との関わりによって獲得する知があります。例えば、生活科などで地域のコマ回し名人から子どもたちはコマの回し方などを学びます。この場合の知は、基本的にエキスパートなどの「わざ」や生き方などを「真似る」ということを通して獲得され、その「わざ」や生き方などから、子どもは自分がもたないような世界観をもつエキスパートを尊敬したりするようになります。

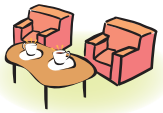
③ 知を介した人間形成

今までのことから、同年齢同士あるいはエキスパートなどとの関わりにより知を獲得することが、人との関わりによる知の獲得といえます。そして、子どもが人と関わることによって人のよさに気付きそれを尊重し、人を尊敬するとともに、自己のよさや可能性にも気付くようになります。

また、子どもが人との関わりにより、人のよさに気付くためには、まず、個のよさを生かす学習指導を行い、それらが互いに関わり合う状況を設定することが大切になります。この状況設定から、子どもは今までの自分にない視点から自己のよさや他の人のよさを見いだすようになります。この学びの過程は、知を介した人間形成の場であるといえます。

読者のページ

Educo Salon〔エデュコサロン〕



●ご意見・ご感想をお寄せください
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-10
教育出版 Educo編集部
ＦＡＸ：03-3238-6975
e-mail：nakayoshi@kyoiku-shuppan.co.jp

●寒々とした教育報道や現場から離れた教育論議が多い中で、『Educo』の誌面は温かく、子どもたちや教師の感性を豊かにし、家庭も地域も元気づけているかのようです。特に“教育NOW”で大槻達也氏は、各教育委員会が「成果の見えにくい取り組み」の努力にも目配りしながら、教育改革の推進役となるよう声援しておられます。また、八尾坂修氏の「教員支援」論からは、“連携（チームワーク）の視点”の大切さが感じられます。そして、川平慈英さんの「今、舞台ができるのは、サッカーで養った基礎体力とチームプレーを身につけたおかげ」という言葉に、教育現場でのヒントを読みとりたいと思いました。（山形県　佐藤　進）

●“子どもたちに「いのち」の教育を”という日野原先生のお話を読んで深く共感しています。私も、「いのち」は両親の愛から生まれ大切に守り育てられていること、その元を辿ると生物の起源にまで遡り、途切れることなく「いのち」のバトンを継いできてくれたお陰で現在の自分が存在すること、そして、世界でたった一つの「いのち」をもっと値うちのある「いのち」に輝かせることが自分の責任であることを子どもたちに訴えてきました。これからも日野原先生からたくさんのパワーをいただいて、“Let's go！の教育”を支援していきたいと思います。（北海道　佐藤正和）

●日野原先生の「新老人の会」の活動はすばらしい。子どもたちは老人の方々からその生き方や生の生涯学習の一端に触れることができるし、大げさに言うと将来の自分の姿をもみることができます。もちろん今の段階ではそれに気づかなくても、いつか気づく時がくるでしょうし、それぞれの子どもの心に新老人の姿が深く浸透しているはずです。まだ75歳に達していない未熟老人にも何か子どもたちの役に立ちたいと心から思いました。（青森県　澁谷　謹）

●「有明海の再生をめざす漁民の森づくり」を読んで、以前、NHKのプロジェクトXで放映された北海道“えりもの昆布漁”を思い出します。海焼けというか塩焼けというか、絶滅寸前の昆布が生き返ったという話。数十年をかけて漁民を中心として子どもたち（今は40代）が植樹した苗が雨・風にも負けじと森に育ち、やがて山から海に流れる腐葉土が栄養分となって、見事なえりもの昆布となりました。それまでの苦労、住民が力を合わせることの大切さが、この有明海の「漁民の森づくり」ととても似ています。次代を担う子どもたちに生きた教育そのものであると思います。（北海道　石井史典）

●2004年冬号の中で、BOOK REVIEWをことのほか関心をもって読んだ。日野原先生の“いのちの教育”が下敷きにあったからかも知れない。金森俊朗『いのちの教科書』の評者今野喜清氏は、読者に大きな指摘を示されており、また『養老孟司の〈逆さメガネ〉』の横須賀薫氏の評も、同じく読者の意欲を高め、読まねばという気にさせられる。現場教師が活字文化から遠ざかっている傾向がみられるが、このような解説は読書への動機づけとなり、教師が自らの教養を高め、教育力を高めることに大いに役立つと考えられる。（埼玉県　斎藤宥雄）

Educo No.4 2004年4月27日発行
発行所 教育出版（株） 発行者 小林一光
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-10 電話03-3238-6982

地球となかよし Column

ほっとな出会い

MASUDA AKEMI

神様は必要な人を与えてくれる

増田明美さん（スポーツジャーナリスト）

◎増田さんの「かけがえのない人」は、俳人・黛まどかさん。三年前、初対面の二人はテレビ番組の収録で東海道の姫街道を歩いた。

その日の終着点へ向けて歩くテンポが違うんですね。私は一秒でも早くゴールしたいマラソン選手ですから、ピッチが早い。だから、景色を眺め草木を一つ一つ見ながらのまどかさんの歩みは、まるで足踏みのように見えました。

話してみるとそれは人生の歩み方そのもの。彼女は、一本の仕事のために十冊の本を読む時間が必要だから他の仕事を断る。私はといえば、仕事は断っちゃいけないからとりあえず一冊読んで、あとは仕事をしながらこなしていこう……と。見事な違いのおかしさに意気投合したのが最初です。

◎そんな全く性格の違う二人は、どこに響き合っただろう。

向かう道が一緒なんですね。まどかさんは俳句で、私はスポーツで、それぞれ他分野との融合を試みています。教育や芸術、音楽など様々。これから五十歳までの生き方を考えたときに、社会の役に立ちたいと思うのです。

志向が似ているせいか、お互いの悩みも理解し合えます。私が丹精してきたある仕事に壁を感じて、ひどく落ち込んでまどかさんに電話したときのこと。彼女はゆっくり話してくれました。「マラソンの増田から、もっと社会的に生きるようにしなきゃ。次のフィールドへ早く動きなさいってことよ。神様から与えられた使命よ」。私、泣いちゃって泣いちゃって、おかげですごく元気になれた……。

まどかさんの口から出る言葉には、不思議な力があります。ほんの三十分程度の電話で気持ちが切り替われるのですから。彼女のメッセージは、五七五を通しての言霊なのだと私は思います。

◎黛さん主宰の句会「百夜句会」へ参加して二年目。増田さんの新しい境地が開けた。

選手への綿密な取材をもとにした定評のあるマラソン解説の他、執筆活動、学校訪問、講演にと多方面で活躍中。

以前、「貴女は同じ言葉を二回繰り返す癖があるから俳句をやった方がいい。俳句は言葉の贅肉が取れる」と、永六輔さんが勧めてくださいました。でも、縁がなかったんですね。垣根が高くて近づきにくいというか。それがまどかさんに出会ったことで、始めることができました。神様は、本当に必要な人を私に与えてくれたんだなぁと思います。少しは褒められる句もできました。『恋を知り紫陽花一つの色になる』『すすきの穂ほっぺにあたる君の声』……。

◎そして、スポーツと俳句の融合が実現した。今年の「ニューイヤー全日本実業団駅伝」中継番組である。視聴者から届いた駅伝にまつわる俳句を、駅伝中継と同時進行で紹介した。

走るという単純なスポーツが、俳句を通してみるとすごく美しいんですよね。ただスピードとか駆け引きだけではなくて、息づかいや襷渡しのところまで句にして詠む。美しかった……。番組で私が詠んだ句は、『待つ君に足音高く息白く』です。駅伝は待っている人がいるから、馬力が出るのだと思います。個人種目ではあの底力は生まれないと。

◎今、増田さんと黛さんは「他分野との融合」という道を、それぞれのテンポで進んでいる。

例えば、教育との融合として、まどかさんは国語審議会の委員として活躍したり、子どもの心を育む五七五の言霊を大切に伝えようとしています。私は、学校訪問を続けて、「走るのはみんな競争と考えているけども、気持ちが弾めば身体も弾むんだよ」という授業をしています。そして、もっと「スポーツの力」が役に立つ場面はないだろうかと模索しているところです。

そんなとき、まどかさんは力強い同志。本当にかけがえのない人に出会わせてもらった縁に感謝しています。

― 編集部より ―

●福岡市にある出版社石風社の一室へ中村哲先生は約束の時間ちょうどに顔を出された。インタビューの準備を整え待ち受けていた我々を見て、「あっ、お客さん？」と言って退室されようとした先生を、「お客さんは先生ですよ」と引き止めると、少年のような恥じらいをみせて席に着かれた。生命の危険にさらされながら20年間もアフガニスタンとパキスタンの人々のために献身的にボランティア活動を続けておられるその激しい生き方が信じられないくらい、目の前の中村先生は、小柄でシャイで穏やかだった。

●増田明美さんにお会いしたのは、アテネ五輪マラソン代表選手が決まった直後だった。増田さんも選考委員のお一人で、インタビューの後、高橋尚子選手の落選について感想を伺った。妥当な結果だったとは思うが、今後は選手たちが悔いを残すことにならないよう、選考基準を見直していきたいと語っておられた。連続金メダルの夢破れた高橋選手の無念さを慮ってのことに違いない。別れ際、選考のあり方についての意見を求められて窮し、「選考レースは一本に」などと非現実的な原則論を口走ってしまった。

なかよし宣言

わたしたちをとりまく自然や社会は、科学技術の進展や国際化、情報化、高齢化などによって、今、大きく変わろうとしています。このような社会の変化の中で、人間や地球上のあらゆる命がのびのびと生きていくためには、人や自然を大切にしながら、共に生きていこうとする優しく大きな心をもつことが求められています。

わたしたちは、この理念を「地球となかよし」というコンセプトワードに込め、社会のさまざまな場面で人間の成長に貢献していきます。